

『蓑谷』

泉鏡花作

全一章

見るから膚の粟立ツばかり涼しげなる瀑に面して、
背を此方に向けたるは、惟ふに彼の怪しの姫なるべ
し。

蓑谷の螢には主ありて、みだりに人の狩るをゆる
し給はず。主といふは美しき女神にておはすよし、
母のつねに語り給ひぬ。

谷をのぼれば丘にして、舊城のありたるあとなり。
下は一面の廣野にて、笹川といふ小川其あひだを横
ぎり流る。

はじめは其廣野にて、ともだちと連れなりしが、
螢一ツ追ひかけて、うか／＼と迷ひ來つ。

野に居たりし時ハヤ人顔の懐しきまで黄昏れたり
しを、樹立彌が上に生茂りて、空の色も見えわかざ
る、谷の色は暗かりき。

地も、岩も、木も草も、冷き水の匂ひして、肩胸のあたり打しめり、身を動かす毎にかさ／＼と鳴るは、幾年か積れる朽葉の、なほ土にもならであるなり。

瀑は樹と樹の茂り累なる梢より落つと見えぬ。半ばより岩にかゝりて三段になりて流る。左の方に小さき堂あり。横縦に鳶かづらのからみたるを、犇と封じて鎖を下せり。岩にせかるゝ瀑の雫、颯と其堂の屋根に灌ぎ、朽目を洩れて、地の上に滴りたり。傍に一尺より二尺までの大きさの地藏尊、右の方を頭となし、次は次より次第に小さきが、一ならびに七體ぞ立たせ給ふ。たゞ瀑のみならず、岩よりも土よりも水とところ／＼湧き出づれば、此處彼處に溜りたる清水溢れて、小石のあはひを枝うちつゝ、白き蛇のひらめくやう、低きに就きて流るゝ音、ものゝ囁くに異らざるを、鬱蒼たる樹立の枝を組み、茂深く包みたれば、きく耳には恰も御佛達その腹の中にて、ものをいふらむ響す。

かゝる處に、身に添へる影もなくて唯一人立ちた

る婦人の、髪も見馴れざる結方なり。黄昏の色と際立ちて、領の色白くあざやかに、曙の蒼き色の、いと薄き衣着たまへる、ふみそろへたる足のあたりは、くらし色に蔽はれて、淡き煙、其帯して膨かなる胸を籠め、肩のあたりのさやかに見えて、すらりと立てる瘦がたの身丈よく、ならびたる七つの地藏の最も高きものゝ頭さへ、やうやく其胸に達するのみ、これを彼の女神ならずと誰か見るべき。

予が追來りたる一つの螢の、さきよりしばし木隠れて、夕の色に紛れしが、蒼き光明かに、彼の小さき堂の屋根に顯れつ。横さまに低く流るゝ如く、地藏の頤のあたりを掠めて、うるはしき姫の後姿の背の半ばに留まりぬ。

「あゝ、」 姫なる神よ、其螢たまはずやといはむとせし、其言いまだ口を出でざるに、彼の君あわたゞしう此方を見向き、小さき予が姿を透し見ざま、驚きたる状して、一足衝とすさるとて、瀑を其頭にあびたり。

左右の肩に颯と音して、玉の簾ゆら／＼とぞ全身

を包みたる。

「螢、下さいな、螢下さいな。
と予は恐氣もなく前に進みぬ。」

螢は彼の君の脇を潜りて、いま袖裏より這ひ出でつゝ、徐に其襟を這ふ時、青き光ひた／＼と、ぬれまとうたる衣を通して、眞白き乳房すきて見えた

鼻高う、眉あざやかに、雪の如き顔の、やゝおもながなるが、此方を瞻りたまへば、

「ねえ、螢一ツ下さいな。母様は然ういッたけれど。あの、神様が大事にして居るんだから取ツちやいけないうッて、さういつたけれど欲いんだもの、一ツ位いゝでせう。」

と甘ゆる如くいひかけつゝ、姫の身近に立寄るに、彼の君はなほものいはで、予が顔を瞻めたまふ。目の色の見ゆるまで、螢の光凄く冴えたり。予は少しく恐氣立ちぬ。其姿の優しければこそ、来るまじき處に来て、神の稜威を犯せしを、罪したまはばいか

にせむと、いまは其あまり氣高きが恐しくて、予は心細くも悲しくなりぬ。

あとへ／＼と退りながら、

「御免なさい、御免なさい、こんだツから來ないから。あれ、うちへ歸して下さいよう。もう／＼螢なんか取らないから、御免よ／＼。」とぞわびたりける。

姫が顔の色やゝ解けて、眉のび、唇ゆるみぬ。

肩寒げに垂れたる手を、たゆたげに胸のあたりに上げて、

「これかえ。」

といひながら、つまみて、掌に乗せたる、蒼きひかり裏すきて、眞白なる手の指のあひだの見えすくまで、太くも渠は瘦せたるかな。

「上げませうか。」

と呼びかけて、手をさしのべたる、袖の下に、わがからだ立寄る時、彼の君のぞくやうに俯向きたれば、はら／＼と後毛溢れて二度ばかり冷かなる雫落

ちぬ。胸むねに抱いだ緊きしめられたる時は、冷つめたさ骨こつ髓ずゐにとほりつゝ、身みは氷こほりとや化くわすらむと、わが手足てあし思おもはずふるひぬ。

「坊ぼうや、いくツだえ。」

「なゝツ」 と呼い吸きの下おに答こたへし身みの、こはそもいかになることぞと、予よは人ひと心こゝろ地ちもあらざりき。

「名なは。」とまた問とひつゞけぬ。

予よは幽かすかに答こたへ得えたり。

「あゝ、みねさん、みイちやんだねえ。」

「えゝ、」

かくて予よを抱いだける右みぎの手てに力ちからを籠こめ、

「もうこんな處ところへ來くるんぢやありません、母おつかさん様さんがお案あんじだらうに、はやくおかへり。」といふはしに衝つとすりぬけて身みをひきぬ。

「入れものはあるかい、」

と姫ひめは此こ方なたに寄より添そひつゝ、予よが手てにさげたる螢ほたる籠かごのちひ小こさき口くちにあてがひて、彼かの螢ほたるを入いれむとして、輕かろくいきかけて吹ふき込こみしが、空そらへそれて、**＝**と立たちて、梢しやうを籠こめて螢ほたるは飛とびたり。

「あれ、」

と空を見上げたる、ぬれ髪は背にあふりて、兩の肩に亂れかゝりぬ。

「取つても可いかい、取つても可いんなら私がとらうや。」

笹の葉一束結附けたる竹棹を持ちたれば、直に瀑におし浸して、空ざまに打掉るにぞ、小雨の如くはら／＼と葉末を鳴して打散りたる、螢は岩陰にかくれ去りき。

やがて地藏の肩に見えぬ。枝のあたりをすいと飛びたり。また葉裏をぞつたひたる。小石の際よりぱつと立ちぬ。つと瀑を横ぎり行く。蒼き光の見えがくれに、姫は予が前後、また右左に附添ひつ。

予はたゞ螢を捕らむとばかり、棹を打ふり／＼て足の浮くまであくがれたる、あたり忽ち月夜となりぬ。

唯見れば舊の廣野なりき。螢狩の人幾群か、わがつれも五七人、先刻には居たりし川も見ゆれど、何

時つの間まにか歸かへりけむ、影かげ一つもあざりき。あたり
はひろ／＼と果はて見えみず、草くさ茫ぼう々／＼と生おひ茂しげれる、野の末すえに
は靄もやを籠こめて、笠岡山かさおかやま朧おぼろ氣けなりし。

上うへの丘をかと下したなる原はらには、年とし長たけてのちニ々しば／＼行ゆけ
ど、瀑たきの音おとのみ聞ききて過すぎつ。われのみならず、叢みの
谷たには恐おそしき魔まし所よなりとて、其その一ひと叢むらの森もりのなかは差さ覗しのぞ
く者ものもあざるよし。優やさしく、貴たかく美うつくしき姫ひめのおも
かげ瞳めにつきて、今いまもなつかしき心こゝち地ぢぞする。

【完】